

## さらに高まる欧米市場でのDSP技術への注目度 — IMPSとTAPPICon 2025で関谷社長が導入効果を講演 —

メンテック(株) (本社・東京都千代田区丸の内)は、国内はもちろん中国などの海外で多くの実績を重ねてきたが、近年は欧米市場で同社技術への注目度が高まっていることから、それぞれ現地法人を設立し両市場のニーズに対応した事業拡充に注力している。

その一環として同社の関谷宏・代表取締役社長も欧米でトップセールスを展開しているが、最近ではドイツで開催された「国際ミュンヘン製紙シンポジウム」(IMPS: International Munich Paper Symposium)、および米国で開催された「TAPPICon 2025」において、自社の独自開発によるドライパート汚れ防止ソリューション“DSP (Dry Section Passivation)”について技術紹介の講演を行った。

ちなみに、今年3月末現在、世界にDSP技術1,061台がペーパーマシン349台に採用され稼働中である。

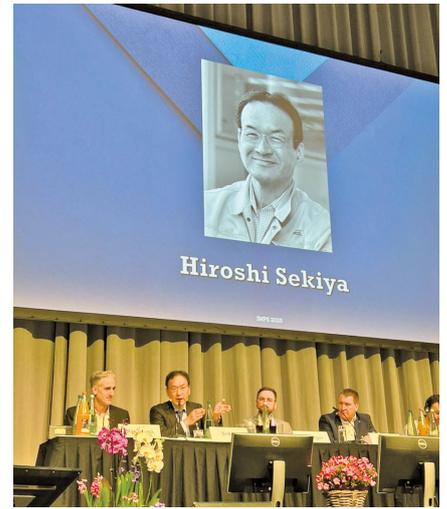
### IMPS

今年、第33回を迎えるIMPSは毎年ミュンヘンで開催される製紙業界の国際技術会議であり、欧州におけるもっとも重要な製紙技術に関する国際シンポジウムの1つ。欧州を中心とする製紙会社をはじめ、装置・薬品サプライヤー、大学・研究機関などが最新技術や実用事

例を共有する場として、紙パ業界で高い評価を得ている。今回は2025年3月25～27日の3日間開催され、“Progress in paper and board production”を統一テーマに、問題解決に繋がる製紙工場 の取組みやサプライヤーの有効技術を解説・提案する講演者が多く招聘されることとなった。このシンポジウムに関谷社長が登壇し、“DSP”に関する発表を行ったもの。

同製品はすでに内外で多くの導入効果を残し順調に実績を伸ばしており、欧州市場でも広く注目される技術となっている。製紙工場より直接寄せられるレポートでは最適化の信頼性と実現可能性の両面からの問題提起が増えていることから、今回の講演では紙・板紙の生産プロセスを最適化し製品品質を向上させる同社の開発技術を提案、とくに関心を集めるプログラムとなった。

講演で関谷社長は最初にDSP開発の歴史とその技術的な特徴を述べ、さらに欧州での導入実績と事例を紹介。開催国であるドイツ国内での事例として、ユーザーである製紙会社と共同で取り組んだ清掃作業の削減と断紙の削減などに関する成果について報告を行い、次いでアジア市場での導入事例として蒸気使用原単位の削減を通じて得られたエネルギーコ



IMPSのシンポジウムで発言するメンテックの関谷社長

ストの抑制効果を具体的に示した。

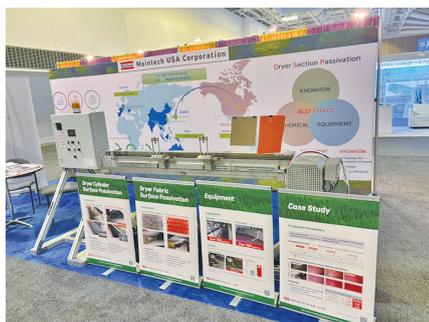
これにより、環境負荷軽減と経済合理性を両立させるソリューションとして日本で生まれたDSPが、カーボンニュートラルを目指す欧州の製紙業界にとっても有用であると強く印象づける結果となった。

この関谷社長によるDSP導入成果の発表は、同分野に関連する技術サプライヤーとの合同セッションで行われ、発表後には質疑応答とディスカッションの時間が設けられた。そこでとくに聴講者の関心テーマとなったのは、ドライパートの汚れによって発生する運転中清掃作業での労働安全上の課題であり、これに対する各社のアプローチが比較され、活発な意見交換が行われた。

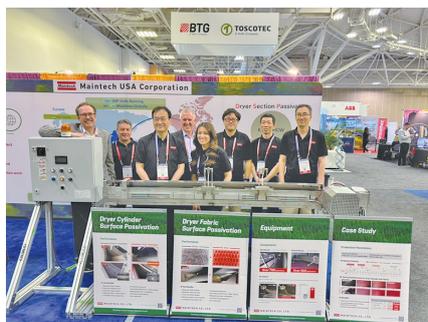
なお、メンテックは2020年より欧州における事業を展開、現在、同市場でのDSP導入台数は69台に増えており、日本発の確かな技術が欧州市場で着々と浸透していることが窺える。



IMPSの国際シンポジウムで登壇しDSPについて技術説明を行う関谷社長(左)と会場の様子



TAPPICon 2025の展示会場に設営されたメンテックの出展ブース



出展ブースでの関谷社長とスタッフの記念撮影



カンファレンスでDSPに関し講演する関谷社長



講演を終えて展示場に設営したメンテックのブースで来場者に説明を行う関谷社長



## TAPPICon 2025

今年5月4～7日の4日間、米国ミネソタ州のミネアポリスで開催された。TAPPI (Technical Association of the Pulp and Paper Industry) は日本で言う紙パルプ技術協会のことで、TAPPIConは年次大会にあたる。毎年4～5月の時期に北米各地で開催される業界最大級の年次大会であり、米国・欧州を中心とした製紙会社、装置・薬品サプライヤー、研究機関などが最新技術や実用事例を共有する場として、製紙業界内で重要な位置づけがなされている。

パルプ、紙・板紙、バイオベース製品などの専門家が参加する国際的なカンファレンスおよび展示会で、技術的な情報交換の場であり、カンファレンスでは最新の研究成果、技術開発、業界の事例紹介などが発表・討議される。関谷社長はそこに講演者として登壇し、“DSP”に関する講演を行った。

関谷社長の講演では、DSPの技術的な特徴、さらに世界・米国における導入実績と成果が述べられた。米国内の

DSPの導入事例では、全米第2位の大型マシンに採用された実績と成果を披露し、それにとまなう追加受注・トライアルの経過についても報告。さらに、Greif社マシロン工場での成果が顧客のコメントとともに掲載されたTAPPIの機関紙「Paper360」での特集記事が紹介され、聴講者は日本発のリサイクル技術がリサイクル社会進展への動きが始まった北米でとくに必要とされることを強く実感することとなった。加えて、欧州市場における導入事例として、断紙削減による生産効率の改善とともに、操業中に行われていた用具交換の危険作業廃止も示された。

これにより、経済合理性と労働安全性を両立できるソリューションとして日本で生まれたDSPは、米国の製紙業界が導入する技術として欠かせないとの認識をもつ機会となった。

そうした反響の大きさを示すように、講演終了後には多くの聴講者がTAPPICon 2025の展示会場にあるメンテックの出展ブースを訪れていた。ドラ

イパートの汚れによって発生する生産性・労働安全上の具体的な課題に対して、北米・カナダの製紙会社と同社ブース担当者により活発な意見交換が行われ、そのなかで課題のある工場へ訪問しての更なる調査、ソリューションの提案を求める顧客が多くいたのは、カンファレンスと展示会に参加した同社の努力が実った形となった。

なお、メンテックは2024年より本格的に北米での事業展開を進め、わずか1年で米国でのDSP導入台数は13台に達し、2025年度もすでに複数台受注しており、日本発の確かな技術が北米市場でも着実に認知されるようになってきている。

メンテックは製紙プロセスにおける汚れを原因とする生産性低下への技術的な問題解決・コンサルティング、さらに装置と薬剤および自動化に向けた次世代統合システムの開発・提供し継続的に事業拡大を果たしてきただけに、IMPS 2025やTAPPICon 2025に相応しい発表内容のサプライヤー技術であることが改めて示されたと言えそうだ。